

西照

西照寺寺報「さいしょう」

第10号

2004年10月28日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

十一月十五日 午後二時(逮夜)〜

午後七時(初夜)〜

十六日 午前九時(晨朝)〜

午前九時半(満日中)〜

布教使 池内瑞雄師(新湊市中央町円徳寺)

西谷山 西照寺



いのちの意味

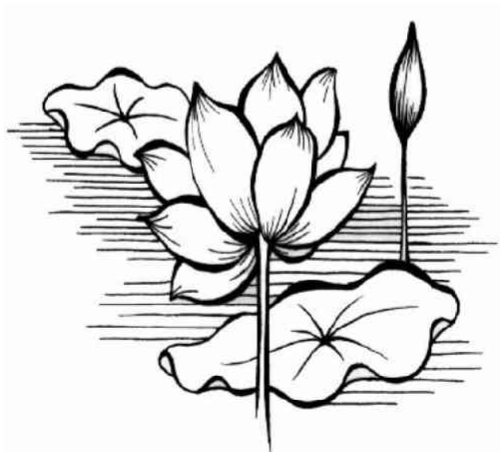
ある訪問介護のボランティアがこんなことを言われていました。

「私の訪問先のおばあさんは、いつも「死にたい、死にたい」と言われます。よくよく聞いてみると、「私は寝たきりになって、まったく役に立たなくなりました。最近では息子や嫁にうっとうしがられ、孫にまで馬鹿にされ、邪魔者扱いにされます。私の生きている意味はどこにもありません。はやく、死にたい」と言われます」という話でした。

この方は「役に立つか、立たないか」というものさしで、自分のいのちを計り、役に立たないからダメだといって、生きる意味を見失っているように見えます。また、家族の人も役に立たなければダメというものさしで、人を裁いているようにも見受けられます。

果たして、役に立たないものは生きる価値がないのでしょうか？

最近の社会はこのような価値観が絶対的なものとしてまかり通っているように思います。資本主義経済の社会では、利益が第一であり、過酷の競争が強いられています。そこでは当然、能力のある人間、役に立つ人間は重宝がられ、そうでない人間は、合理化とか、リストラとかいって切り捨てられていきます。このような経済の論



理が人間のいのちにまで当てはめられています。「現代社会はいのちがモノ化、商品化されている」という言葉を聞きますが、経済社会はともかく、人間の存在そのものまでがそう考えられていることは、大きな問題を感じます。

このような考え方は、やがて優生主義といって、優れたものを残して劣ったものを排除していこうという考え方につながっていきま

す。かつて、ナチスドイツは、障害者を大量虐殺しました。日本ではハンセン病患者を隔離絶滅するという政策がとられました。

「役に立つ、立たない」というものさしで人を裁いていく。私たちは同じことを、今の世の中でほとんど無意識のうちにやっている

のではないでしょうか。

人は、一つのものさしだけではかれるものではありません。

よく言われることですが、「子どもは学校の成績だけでは評価できない」と。心の優しい子もいます。人付き合いがうまい子もいます。

スポーツが得意な子もいます。人にはさまざまな見方と能力があります。何が良くて、悪いのか、わかりません。私たちは自分の都合で善い悪い、役に立つ、立たないを言っているだけです。

仏さまのものさし

仏さまのお国を浄土といますが、浄土の人々は、皆なそれぞれに尊く金色に輝いていると示されています。仏様のものさしで見れば、人間は存在そのもののなかに百点満点の意味と輝きをもっているということなのです。

そのお心をいだかれた親鸞様は、「善悪のふたつ、総じてもって存知せざるなり」（歎異抄）とおっしゃられ、更には「火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつてそらごととわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とおっしゃっています。

仏さまの目から見れば、皆尊く輝いているのに、人間の勝手な都合で善し悪しを決めてもダメです。人間のすることは、すべて、うそいつわりに満ち満ちています。そういう、私であると気づかせてくださるのが仏さまのはたらきです。だから、仏さまのお心に従っていくことが大切です。お念仏（仏さま）だけが真実ですよ。と教えてください。

そして、「善悪の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり」（正像末和讃）と、いわれます。善し悪しを決めている私たちは本ま物ではありませんよ、とおっしゃられます。

仏さまの眼からみれば、人には、さまざまな見方や価値があります。たとえ、寝たきりであっても、価値があり、意味があります。いてくれるだけでいい、家族の支えになると思うこともあるだろうし、また、たとえ、寝たきりであっても、周囲の有頂天になっている息子たちに、人は老いて病んで死に逝く身であるという人生の厳粛なる事実を教えているということもあります。

人は存在そのものに意味があるのです。

（本願寺新報二〇〇〇年十一月十日号 みんなの法話
田代俊孝氏の文章をもとに書き直しました。文責任職）

真宗の行事

ほう おん こう < 報 恩 講 >

報恩講は、宗祖親鸞聖人しんらんしょうにんのご苦勞をしのび、そのご苦勞を通じて、阿弥陀如来のお救いをいただくことをあらためて心に深く味わわせていただく法要です。私たちにとって浄土真宗の門信徒であることを身をもって示す、もつとも大切なご法縁といえます。

親鸞聖人御在世当時、お念仏を喜ぶ人々の間では、師法然上人ご命日に「二十五日のお念仏」として念仏の集會がつとまっていた。

親鸞聖人ご往生の後、聖人を祖と仰ぐ私たちの先達は、それを親鸞聖人のご命日にあらため、ご法縁にあずかっていたのです。

その後、親鸞聖人の 33 回忌にあたり、第三代覚如上人はそのご遺徳を鑽仰するために『報恩講式』（報恩講に拝読する聖教）をつくれ、報恩講がいとなまれました。以来、聖人のご命日の法要は報恩講として大切にお勤まりになっています。

蓮如上人がお示しのお通り、正しくお念仏のいわれを聞かせていただき、身にいただいて、真実信心の行者になることが聖人のご恩に報いる道です。

親鸞聖人のご命日は旧暦 11 月 28 日です。本願寺では、これを太陽暦にあらためて 1 月 16 日とし、1 月 9 日から 16 日まで御正忌報恩講をお勤めしております。7 日間のお勤めですので、七昼夜報恩講とも言います。

この本願寺の報恩講にみんなでお参りするため、全国の末寺や御門徒の間では、「お取越し」「お引きあげ」といって前年の秋から年暮れにかけて、報恩講をお勤めしているところが多いようです。



一九八九年以來長らく休刊して
いました寺報「西照」を再会
いたすことにいたしました。報恩
講、御正忌、永代経の折に年三
回発刊する予定にしています。